

らしっく

自分らしく、
粋な暮らし

まちづくり・生涯学習情報誌

特集

P.1

らしっく通巻20号記念

今日から始める 生涯学習

- 座談会 生涯学習を楽しもう！
- 公民館から始めよう！！
- 大学を利用しよう！！

● プラザ通信 P.5

● らしっく情報の森 P.9

● ひろしま八区イベントガイド P.11

2008.3

枸橘号
Vol.20

『からたちの花が咲いたよ』の童謡でおなじみの、枸橘。北原白秋が作曲者の山田耕筈の体験を元にして作詞したといわれています。純白の花・甘い香り・青くて痛いトゲ・優しくしてくれた友達…あなたはどんな時、懐かしいあの頃を思い出しますか。

座談会

今日から始める生涯学習

まちづくり・生涯学習情報誌として2002年の12月に創刊以来、生涯学習の意義や楽しさをお伝えしてきた『らしく』が今号で通巻20号に到達しました。人間で20といえば、成人となる記念すべき区切り。いまあらためて「生涯学習を楽しもう！」。世代を超えて生涯学習を楽しんでおられる方々に集まっていたきました。



阿部 頼繁さん／50歳代
劇団「花子ちゃんとそのお友だち」代表
劇団は昨年創立25年を迎えた。特別支援学校などでの上演や演技指導、脚本づくりなど、演劇を通して多彩な活動を行っている。



西廣 邦子さん／60歳代
余暇生活相談員。シニアライフアドバイザー
二葉公民館での余暇相談会相談員として活躍するほか、「自由に出歩くためには夫に料理を身につけてもらうのが一番」と自宅で料理教室を主宰。



坂本 牧子さん／40歳代
子育て・サークル応援グループ「MaMaぼっけ」代表。e子育てセンター・スタッフ
平成元年に地元祇園西公民館で育児サークルを作り、子どもと一緒に活動。子どもが成長した今では育児を応援する側となり「MaMaぼっけ」を立ち上げ、一貫して子育てをテーマに幅広く活躍中。



保光 義文さん／70歳代
博士(工学)。広島市環境サポーター。
環境庁環境カウンセラー
住まいが瀬野川川間近ということや、もともと釣具店を経営していたことから、瀬野川を中心に自然に親しみ、環境についての調査・研究を始める。大学にも通い、昨年工学博士号を取得。

気づいたときには自分の楽しみになっていた。

司会 まず、皆さんの活動について教えてください。

保光 今から20、25年ぐらい前、まだ公害問題が厳しかったころ、お化けハゼがたくさん獲れていたんですね。これは何が原因なのかという素朴な疑問から川を調べ始めたんです。それからカゲロウとか、トビケラとかを調べて、川がきれいになっているのか、汚くなっているのかを毎年のように発表しています。あとは、環境大学の講師や学校の総合学習で年70回ぐらい講師を務めています。また(地元)の公民館では、「瀬野川ホタルの会」を立ち上げて5、6年になります。

西廣 4年前に余暇生活相談員養成講座(二期生)を受講しました。その1年半ぐらい前に身内を亡くしたりして、すごく落ち込んで鬱になっていた時期があったんですね。そのときたまたま、余暇プランナーの会員と出合って「元気が出るから来ないか」と声をかけてもらって受講したのがきっかけでした。私たちは、団塊世代の人が退職後、元気で生き生き過ごしていただくために相談に乗ったり、具体的に指導したりするために養成され活動しています。

坂本 私は子どもが大好きで、結婚前は保育園に勤めていました。で、何も疑問に思わずに寿退職したんです。でも、長女が生まれたとき家に二人でいて、「何か違うな」と思ったんです。保育園のように、大勢の子どもたちの中で我が子たちにも育ってほしいなあ、と、最

坂本 確かにそうですね。私たち子育て真っ最中世代がボランティア活動を続けていくことは、大変なことも多いです。でも、辞めることのできない何か：使命感とはいえないけれど、この活動が好きで、活動への思いは大きいですね。

西廣 たくさんの人と出会えるっていう喜びがありますね。そういう人たちと触れあうことで、自分にはないものを得られますし。自分の足りないところが見えてくると、何を勉強すればいいかわかる。向上心につながる。どんどんそういうことで世界が広がっていくというのが、何よりの喜びですね。外に出ていく楽しさって、近所の方とお話する楽しさとは違って、こんなことしている人がいるんだっていう出合いの喜びがたくさんあること。一緒に活動している仲間は、学区内ではなくて広島市内外の広範囲に及ぶし、子どもが大きい人いれば、小さい人もいます。だからいろんな面でアドバイスし合ったり、学びの場になっています。

阿部 人のマイナス部分をプラスに変えたりするのに、お芝居は役立っているんだと思います。自分の好きなことが役に立っているのは非常にうれしい。若いときは、ただお芝居をし、表現すればいいと思っていたのですが、30歳を過ぎてくると、そろそろ社会にお返ししてもいいんじゃないかなと思うようになってきました。目の前でお客さんの表情が変わったり、本当に生き生きされているのを見るのがやり甲斐ですね。

保光 紙飛行機をたくさん作って幼稚

初はそんな思いだったんです。でもどうしたらいいか何も分からないので、足を運んだのが祇園西公民館でした。気づいたときは自分の楽しみになってました。今は活動の幅が広がって行政とは違う民間でできる子育て支援センター的な役割を担う活動もさせてもらっています。

阿部 高校の頃、杉村春子さんのお芝居を見て始めたのが最初。昭和55年に広島市青少年センターで練習を始めたのが劇団「花子ちゃんとそのお友だち」で、いまだにお芝居をやっています。その間、いろんな方から声をかけていただき、フワワーフェスティバルやY M C A、消費生活センターなどで、それぞれお題をいただいて、たとえば消費に関して詐欺が多いから気をつけましょう、といった皆さんを楽しく啓発できる芝居をやってきました。

自分の好きなことが役に立っているのが非常にうれしい

司会 皆さんそれぞれ楽しんでらっしゃいますが、どういうところがやりがい、生き甲斐みたいになっていますか？

保光 自分はこれをやらなくてはいけないだ、という一つの使命感が、ある時期から出てきたと思うんですよ。誰もやってないし、大学にも1年か2年ぐらいのデーターしか残ってない。継続して変化が見られるデーターが欲しいからね。でも、実際、今は少し苦痛なんです(笑)。自分一人だけでやるのならいいんですけど、みんなと一緒にやるということになれば、制約があるし、金銭的な問題もありますしね。

園へ持つて行くんです。ホタルの関係で行くんですけど「おい、ホタルを飛ばそうや」つてね。ホタルの模型を飛ばしてひらひらと飛んでいくでしょ。そのときの子どもの顔がね、とてもいい。

阿部 保光さんもうれしそうな顔してる(笑)。

保光 そうなんです。そのときの感動があるから行くんですよ。その喜びがあるからボランティアができるんよ。

だから、公民館から始める

司会 坂本さんの場合は何か始めようと思ったときに、まず公民館に行かれたわけですね。ほかではなく、公民館に行こうと思ったのは何かありますか？

坂本 一番行きやすく、身近な場所。それまではあんまり利用しなかったんです。まずは場所探しのつもりで行ったんですが、そこで職員さんがきちんと話を聞いてくださって、同じことをしている人となつないでくださったから、ずっとそこへ行き続けたわけです。

保光 公民館はね、私らの若い頃からキーステーションになって盆踊りをやったり、お祭りをやったり、あそこは会合の場だった。公民館がアドバイスをしながら、こうしたほうがいいよつてやっていくのが、地域としては一番やりやすい。

西廣 私たちも「何かやりたい」と思っているんですが、何をしたいか分からないくて」という相談をよく受けるんですが、そういうときは、まずは公民館だと思っていますね。

